

11. 胸壁に生じた Morel-Lavallée lesion の 1 例

中口美央、橋詰典弘、渡邊孝太、相原麻琴、村瀬悠也、藤岡亜門、福谷光平、府瀬川浩佑、大崎駿、
藤澤英文

昭和医科大学横浜市北部病院 放射線科

症例は 50 代男性。自宅の浴室で転倒し、受傷 1 週間後から両下腿、次いで頸部から右肩の疼痛を自覚した。受傷 2 週間後の単純 CT で右胸壁直下に軽度液貯留を認めた。受傷 7 週間後の単純 CT で液貯留は肩甲骨下から右胸壁直下に増大し、隔壁を認めた。受傷 8 週間後の胸部 MRI では同部位に整な隔壁を伴う境界明瞭な病変で、性状は T1 強調像で均一低信号、T2 強調像で高信号内に一部低信号を認め、陳旧性出血を合併した漿液成分の液貯留が疑われた。また、両側下肢前脛骨筋周囲にも同様の液貯留を認めた。受傷後に遷延する液貯留であり、臨床的に Morel-Lavallée lesion (MLL) と診断された。

MLL は外傷後に傍筋膜に遷延するリンパ液および血液の貯留を認める閉鎖性デグロービング損傷である。本例は治療に耐えうる全身状態ではなかったため治療介入はおこなわれなかったが、慢性化すると重篤な感染をきたすことが知られており早期の診断治療のための的確な画像診断は重要である。MLL の好発部位は大腿近位部とされ、胸壁の報告は稀である。